令和６年度

（第３回）

豊橋市　子ども・子育て会議

日　　時　　令和６年１０月２４日（木）

場　　所　　豊橋市役所東館８階　８６会議室

令和６年度　第３回
豊橋市　子ども・子育て会議

日時：令和６年１０月２４日（木）
午後２時～午後３時３０分
場所：豊橋市役所東館８階８６会議室

出席者

豊橋市子ども・子育て会議　出席者１０名

事務局
　ただいまから令和６年度第３回豊橋市子ども・子育て会議を開催させていただきます。
　はじめに豊橋市こども未来部長よりごあいさつ申し上げます。

こども未来部長よりあいさつ

事務局
　ありがとうございました。続きまして、佐野会長よりごあいさつをいただきます。

佐野会長よりあいさつ

事務局
　ありがとうございました。
　委員の欠席についてはお手元の名簿の通りですが、議事に入ります前に、資料の確認をさせていただきます。
　事前にお送りさせていただいた資料は、次第と資料１～資料３になります。本日、机上に配布させていただいた資料が、委員名簿と配席図、資料４になります。
　それではここからは会長に議事進行をお願いいたします。

佐野会長
　それでは議題１「豊橋市こども計画の考え方について」事務局から説明をお願いします。

事務局より議題１について説明

佐野会長
　ありがとうございました。何かご質問等ありますでしょうか。
　続きまして、議題の２「こどもの意見を聴く取り組みについて」事務局から説明をお願いします。

事務局より議題２について説明

佐野会長
　ありがとうございました。何かご質問等ありますでしょうか。
　こどもの意見を聴く授業について、実施校の抽出はどのように行ったのか。

子育て支援課長
　春先に行われた小中学校の校長会議の中で、こどもの意見を聴く授業の実施について依頼をし、希望があった学校にて実施した。

佐野会長
　ありがとうございます。他よろしいでしょうか。
　続きまして、議題の３「豊橋市こども計画における評価指標について」事務局から説明をお願いします。

事務局より議題３について説明

佐野会長
　ありがとうございました。何かご質問等ありますでしょうか。
　続きまして、議題の４「教育、保育・地域子ども・子育て支援事業の量の見込みと確保方策について」事務局から説明をお願いします。

事務局より議題４について説明

佐野会長
　ありがとうございました。何かご質問等ありますでしょうか。

大谷委員
　こどもの意見を聴く取り組みというのがとても面白いなと思うし、資料に記載されているこどもたちから出た意見というのが、とても面白いなと思った。
　例えば豊橋にもディズニーランドを作ってほしいという意見が出たときに、どのように対応しているのかを教えてほしい。
　意見した子に対し、なぜ作って欲しいのか聴いたときの返答が、「お母さんが喜ぶから」なのか、「自分がミッキー大好きだから」なのか、「豊橋にもみんなに威張ることができる施設がある」って言いたいのか、それによって、方向性は全然違うと思う。この意見が出たときに、掘り下げて聴いているのか、聴いているとしたらどのように聴いているのか、どう受け取るのかということがとても大切なことだなと思ったのでお聞きしたい。

子育て支援課長
　こどもの意見を聴く授業では、授業に入る前に、児童生徒にはこの授業は正解、不正解はないので、自分が思ったことを自由に言ってほしいということをお願いしている。最初はモジモジしている子たちも「ディズニーランドがほしい」「イオンがほしい」などの意見が出始めると活発になる。意見に対しては、いいねと言った後に、じゃあどこに作ろうか、どんなふうに作ろうか、という話を聴き、「自分たちが行きたいから」、「豊橋が活性化するようなところに来てくれれば、もっと人が集まるから」といった意見が多く出される。こどもたちだけで校

区外に外出することが難しいので、自分が住んでいる校区に欲しいという意見もあった。
「学校のグラウンドに作ってくれないか」、「ちょっとそれだと場所として狭いかもしれないね」、「そしたらもうちょっと広い場所が必要だけどどうしようか」、といった話をしていくと、様々な意見が出てくる。そのような話から、「石巻方面とかになると、なかなか買い物に行ける場所がない」、「自分たちで行こうとしても行けないし、おじいちゃんおばあちゃんも行けないし、もっと商店街みたいなものができたらいいのに」、といった実用的な意見になっていき、そこから会話が広がりいろんな意見をいただいた。

周布委員
こどもの意見を聴く取り組みがすごく大事になってくると思う。豊橋特有で生かせるものを広げていくことがすごく良いことに繋がっていくかもしれないと思っている。
授業について、「未来のとよはし」という抽象的なテーマであると、小学校３年生はまだ具体的には考えられない学年だと思う。こどもたちには自分の意見を聴いてもらう体験をしてもらいたいと思う。意見が具体的に政策になるかどうかではなく、大人がこどもの意見を聴いてくれる場があるだけでいいと思う。これは短期的、単発的なものではなく、日常的に学校の中で大人がこどもの意見を聴く、こどもたちも意見が言える、そこで多様性が学べる体験ができるとよいので、可能であれば選別した実施校だけではなく、毎日、朝の時間や帰りの時間に小学校でも当たり前に話が聴いてもらえる、話せるという場があることが望ましいと思う。最終的に小学生が若者になったときに、自分の意見が表明できることに繋がるので、ここの小学生の意見が直接何かになるというよりは、そこに種もまいておくっていう意味で、継続していただきたいと思う。

佐野会長
豊橋創造大学では都市計画や景観系の委員を大学に招き、豊橋の地図を使用し景観について勉強させており、同様に地図を使用しこどもたちに対して保育ができないかという話をしている。それとつなげてここに何があったら楽しいかというような切り口でつなげていけば軸が繋がるんじゃないのかなと思っている。
今までの行政はどちらかというと縦割りなので、横で何をやっているかわからないところがあったと思うが、今では横串を刺すことが重要であると思う。各課では豊橋市はすごいいいことやっていると思うが、組織が巨大なので、なかなか横の繋がりがない。繋げたとしても人事異動で担当職員が変わるという弊害もあると思う。今、そういうことを都市計画系がうちの大学でもやっていて、１年生２年生と連続でやっているので、それを小学校や中学校にも繋げれば、豊橋の街が大好きだという子が生まれてくるのではないのかと思う。

古川委員
資料３の評価指標について、例えば、７つの目標の評価指標は、アンケートと同様のもので行うということだと思うが、今回のアンケート調査結果について、満足度の年代別割合を見ると年齢が上がるほど下がっている。
現状値の１つ目の項目では87.7%となっているが、例えばアンケートを小学生にたくさん答えてもらうと、この割合が上がってくる可能性が高くなる。そういう作為的なことがないように、４つの年代を平均して算出するなど、算出方法を考えたほうがいいと思う。
３つの視点における目標達成のための取り組みに対する評価指標の中で、例えば、「意見を表明する機会の確保」は実施回数や参加者数で十分評価できると思うが、基本的には満足度を評価指標にした方が良いと思う。
評価指標の中のこども発達センター利用者数について、こども発達センターは非常に待ち時間が長いというのが課題であると思うが、そのようなことを考慮すると満足度を評価指標としたほうが良いと考える。全般的に評価しづらい項目が多いと思うが、市が把握しやすいアウト

プットのようなものではなく、できる限り利用者側の立場で回答してもらうことから得られる数値を指標とした方が良いのでは。
　資料３に掲載しているこどもの居場所の数については、市全体ではなく区域ごとに考えていくべきだと思う。
　特に、一時預かり事業や病児保育事業について、全域で見込むということになっているが、これは次期計画において確定ということなのか。病児保育事業については、４か所でずっと実施していくように見えるが認識を伺いたい。

保育課長
　病児保育事業の今後の実施か所数を４か所としているが、コロナ禍での利用者数の落ち込みとその後のゆり戻しもを含め利用状況を注視している。利用状況を踏まえ、事業の方向性を精査する必要があると認識している。現時点ではこの表記になっているが、今後施策を考えていく中で、変わる可能性はあると思っているので、いただいた意見を踏まえながら考えていく。
　一時預かり事業についても、実績ベースで見込んでいるが、利用状況等を踏まえ方向性について整理する。

古川委員
　病児保育事業については、通ってる保育園で預かることができれば、恐らく利用者数は増えると思う。そのような環境を整えるという姿勢が見えるといいのではないか。ニーズと利用者数は相当な開きがあるのではと推測する。ご検討いただければと思う。

吉田委員
　７つの目標について、パーセンテージが非常に高いと思うが、学校や校区の特徴に起因する部分があると思う。アンケートの聞き方について、設問があって選択肢を選ぶのか、記述できるようになっているのか。例えば、たくさんのあそびやまなび、体験をすることができると感じることがあるとした時に、それはどのような時に、どのようなところで感じるのか。あるいは、大切にされていると感じるのであれば、それはどのような時に感じたのか、誰の言葉でそのようなことを感じたのかということを聞き取れると、本当の数字やこどもの心の中が見えてくると思う。時間はかかるかもしれないが、翌日に回収しているのであれば、学校の中で考える時間を確保できればと思う。現状、市職員が訪問し話をしているが、年齢が近い大学生や高校生が小学校などに訪問し、話を聴くというのはどうか。学習支援など積極的に行っている大学生もたくさんいるので、そのような方たちにお願いをして、大学生のお兄さんお姉さんと話をしながらこのアンケートを取ると、もう少し実態が見えてくるのではないかなと思う。この数字だけ見ると、とてもすばらしい数字なので、それほどこどもたちに悩みがないのではないかと見えてしまうが、実際には、不登校生徒が多く、市立高校には定員以上の応募があり、今年は何人か不合格となる生徒がいたという話も聞いている。外国籍のこどもたちが多いということだけではなく、さまざまな要因があるように思う。
　こどもの意見を聴くときに、外国籍のこどもたちにどのように聴くのかは課題である。小学校に上がるまで、地域の人と誰とも関わってこなかった外国籍の方がおり、その人にコミュニティを作りたいがどうしようかという相談を学校から受けたことがある。そのような取組を行っていた学校関係者を紹介したら、とても喜んでいた。こどもに問題があり外に出られなかったということもあるかもしれないが、そのような人つなぎを行っているので、多様な人材を活用し、政策に生かすということをもう少し深く考えてもいいと思うのでお考えであればお聞きしたい。

子育て支援課長
　アンケートについては、ＷＥＢで回答するということや、小学校１年生から対象としていることを考慮し、基本的には選択型としているが、その中で自由意見も書ける欄を設けた。自由意見の回答は、精査しているが、回答があった意見についてしっかりと読み解いていく必要があると考えている。
　基本的には手紙を自宅に持ち帰り回答いただいた。アンケートの難しさではあるが、実施主体に回答を寄せてしまうことがあるのではないかと思われる。今回、ここまで数値が高かったのは、聞き方の問題だった可能性はあるが、こどもに対して実施するアンケートや意見を聞く授業の難しさを感じている。ここからがスタートであって、年間を通して継続して実施していくことが非常に重要になると思う。委員から継続して実施することを望む意見があったが、この取り組みは計画を作るためだけに実施していることではないので、今後５年間をかけて、しっかりと継続していきたい。こども未来部だけで実施するのではなく、今年度実施したことを庁内にも周知していく。様々な事業において、関係する地域のことであった場合には、その地域の小学校や中学校、高校などから意見を聴きながら、事業に反映していくことを考えている。その都度、こども未来部と他部局が連携しながら実施していきたい。委員から意見等いただき、参考にしながら進めていきたいと思っている。

後藤委員
　放課後等デイサービスの利用定員数について、子の障害の重度によって利用できるところが全く異なっている。例えば知的障害の方で歩ける方は利用できる施設があるが、医療的ケアが必要な方は、受け入れ可能な施設が限られていて、利用できていない方もいる。
自分のこどもが 25 歳で障害があるが、25 年前は、そのような制度がなかったので、今はかなり恵まれていると思っている。私自身も、２人目に恵まれず、病院に通っていたが、深い治療になると、こどもを連れていくことができず、預け先がないためそれ以上の治療はできなかった。現在もケアが必要なお子さんの預け先がなく様々なことを我慢している親がいるので、その辺りをもう少し精査して調査してほしい。定員数のみで判断できるものではないと思う。
　居場所について公園でインクルーシブ遊具の導入を検討している思うが、遊具だけではなく施設全体としての整備が重要であると思う。美術博物館が改修工事を行ったが、トイレにベビーベッドはついているが、大人用のベッドがついていない。美術博物館は赤ちゃんよりも大人が来館するほうが多いと思うが、改修したのにそのようなところが取りこぼされているのがとても残念である。

子育て支援課長
　障害者の関係部署は当会議の構成員ではないため代わりに答える。評価指標として、放課後等デイサービスの定員数を記載している。定員は、施設数が増えれば変わるものだが、実際に各利用ニーズに対してどの程度受け入れられているのかという数値を入れた方がというような意見もある。ここについては、現状は定員数としているが、担当課と話をし適切な指標設定を検討している
　こども発達センター利用者数についても同様であるが、やはり数は目に見えて増加しており、医療的ケアの重要性というものは、非常に重要であると考えている。今後、こども若者の意見を聴く取り組みの中で、障害があるこどもを持つご家族の方の意見もいただきながら、本当に何を必要とされているのか担当課の職員と一緒に伺いながら、しっかりと受け止めて、できることを精査していきたいと思っている。また、インクルーシブ遊具の導入検討の動きがあるのでこちらもしっかりと協力しながら取り組んでいく。赤ちゃん用のおむつ交換台を使用する方は少数であることは承知している。道の駅とよはしには大人も使用できるものがあるが美術博物館も同様の工事が行われているものと考えていた。
やはり新たな施設を作るときには、このような考え方を持って、施設を作る必要があると考えているので、意見があった旨担当課に伝えさせていただきたい。

周布委員
　豊橋は共働き子育てしやすいまちのランキングで第３位になっており、こどもを育てやすいと言われているが、母親の横の繋がりが少ないと感じている。例えば０歳から、なぜこどもを預けなきゃいけないことになるのか、３歳までは子育てができないのかと考える。母親同士の繋がりがあれば、誰かに少しだけ見ていてもらうことができ、定員に達している施設に預ける必要もない。
今は少しだけこどもを見ていてもらえるような横の繋がりが全くないと思う。
それぞれの家庭の事情を理由に横の繋がりがなくなってしまい、母親から育児を奪ってしまうと、そのこどもが親になったときに、子育てができないと思う。自分が保育所でしか育てられた覚えがない子が、子育てができないと思う。そうすると、こどもを産みたくなくなるし、結婚もしたくなくなると思う。子育てをする世代を作るのであれば、お母さんと一緒にいた時間が十分にあり、周りの母親の繋がりがあって、地域で育てられたという実感が欲しいと思う。保育施設は充実しているが預ければいいという考え方になっている。
　子育ては楽しくて、その時しかできない人生において非常に素晴らしいものであるということをどのようにして伝えられるかということが重要である。様々なサービスを実施しているが、根本的なこどもを育てることに対する支援が欲しいと思う。お母さん同士でこどもを連れて外に行くという場所があってくれた方が、横の繋がりができたり障害があることの特性等を知ってもらえる機会にもなると思う。お母さんたちが子育てをしっかりとできる機会も欲しいと思う。

夏目委員
　人生 80 年、100 年と言われている中で、24 時間 365 日こどもを見ることができるのは３歳までと言われている。それをなぜすぐ保育園に預けてしまうのか。私自身、こどもを３歳まで自分で育てたかったが、働かざるを得なかった。こどもを預けることで、親と過ごす時間が短くなるのは、こどもにとっては良いことだとは思わない。寂しい思いをするこどもを増やしたくないと思えば、結婚したくない、こどもを産みたくないという考えになりこどもを産まない選択をすればつらい思いをする必要がなくなるという考えに至るのではないか。親が働ければいいという問題ではなく、母親から育児を奪わないでほしいと思う。病児保育もそうだが、こどもが熱を出した時に預けることができる場所を確保するのではなく、仕事を休めるという状況が一番良いと思う。自分のこどもは自分で育てていかないと、愛着は生まれない。生きていくために働かないといけないのはわかるが、こどもは本当に寂しい思いをしていると思う。こどもに何かあった時に預けることができるのではなく、もう少し休みやすい、働きやすい環境になることが大事なのではないか。

佐野会長
　これまで横の連携を作ってきた吉田委員がいますがいかがでしょうか。

吉田委員
　20 年前、豊川市で高校生の方が全く知らない主婦を刺してしまう事件が起き、育ちとはなんだろうということを考えた。小さいころはこどもを預けて済ますこともあるが、そのあとのフォローや、親子の繋がり、家族の中の作り等が関係し、大きくなって出てしまったのではないか。各団体が各々の活動をしていたが、０歳から 18 歳までの対象者と繋がる支援をしようということで作った団体がゆずり葉である。
　20 数年前に女性が働く、こどもを預かる社会になってきたが、３歳までのこどもはできることも違う、喜ぶ顔も違うとなると、この時間を人に預けるなんて、と私も思っていた。その頃、核家族が増え、そのような方が行き詰まることもあってできたのがここにこサークルである。
ここにこサークルは全校区にはまだないと思うので努力してほしい。

過去には子育てに関わっているおばあちゃんたちとか若い方、民生委員児童委員の方達が協力しながら、月に１、２回、校区で広場を開いており、今もある。
　そのような場を知っていただき、関わっていただいて、お母さん方が集まって新しいことを実施するといったまた違う時代にランクアップできるといいと思う。そのように繋がり、子育てや仕事等のいろいろな話をしながら、過ごしたので、そのような時間は貴重だったと思う。
　豊橋は中小企業が多くて、従業員が 10 人とか 30 人とかの会社がすごく多く、１人お休みした場合に、代替人員をどのようにするのかという課題があり対応は難しいといわれた。その働き方をどのようにサポートするかを考えて欲しいということを言ってきたが難しかった。同じ仕事であれば他の方でもできると思うので、例えば会計業務や労務関係については、企業間でサポートし合えないかということを、会議で言ったことがあるが、情報を外部に出されては困るということであった。そういうのを超えて働き方をきちんと考えないといけないと思った。こどもを自分で育てたいって思ってらっしゃるお母さんがたくさんいるということをお聞きしてうれしかった。
　テレビでおむつの宣伝をした時、ブルーの色でやったら、うちの子のおしっこがブルーじゃないんですけど、と真面目な顔で言われた。そこから今は赤ちゃんを連れていきこどもたちと触れ合う活動をされているところもある。そういうお気持ちでいらっしゃる方が、多分もっともっとたくさんいると思うので、思っていてもできなかったりとか、先ほど言ったようにお勤めしなきゃいけないという状況もあると、そこをどうやっていくかっていうのは、もっとみんなで声を出していけたらいいと思う。

佐野会長
　京都大学の霊長類の研究所の教授の方が、豊橋創造大学で講演をした時があり、子育てというのは、基本的には、保護者、親が直接見るのが最善だと思うが、０～２歳の愛着形成期が重要であり、その時期に愛情をもってかかわってくれる人であれば親でなくても大丈夫という結果が出ている。
　自分の教え子たちには０～２歳児を担当したら、家庭にいる以上に、こどもの面倒を見るように伝えている。まだ数値的には脳科学とかが発達してないから数値には表れないけれども、そこがその子の、基本的なパラメーターを決めていくところだぞと伝えている。
　子育ての大事さ、子育て支援というのは、ただ預かるだけではなくて、どのように子育てしていきましょうという、啓蒙活動が入っていると考えている。
　先ほど意見があったように社会がよくならないと、共働きをするしかないと思う。
　そこを変えようという社会なってきていると思うので、このような機会に意見を言っていただけると、役所の方々もそれを受けてくれると思う。

清水委員
　企業の応援をするわけではないが、年々企業の方も、休みやすい体制を作った企業があるとか、時間で休めるようになった中小企業もあるので、そういうのがだんだん増えていくといいと思う。水平展開が大事であり、実施した企業の類似企業はあそこの企業が実施したのだから、うちもできるという考え方になれば、少しずつ子育てができる環境ができるのではないかと思う。
　こどもの意見を聴くことについては、大変いい取り組みなので希望する学校に限らず、全体でできるといいと思う。こどもたちから出た意見には「未来のとよはし」というテーマだが、現状に関する意見もあるので、こどもの意見を聴いた上で、すぐに対応するとこどもでも意見を言えば叶うのだとなればより実現的な意見が出てくると感じた。

安井委員
　子育て応援企業ではあるが、悩みながら取り組みを実施している。

ダイバーシティーの時代であり、今や、結婚したほうがいい、こどもがいた方がいい、家族で幸せだったらいいというように思うこと自体の整理をかけながらさまざまな取り組みをしている。社員もいろいろタイプがいるので、邪魔をしないようにするべきであると思っている。
休みたければ休めるように、働きたいのであれば働けるようにしてあげることが重要だと思う。
計画の基本理念で、「すべてのこどもが夢や希望を持ち、こどもたちのえがおと元気な声があふれるまち」というのを私もすごく思っている。
こどもは夢を持ってなきゃいけない、希望を持ってなきゃいけない、こどもだから素直じゃなきゃだめなのか、元気な声じゃなきゃだめなんだというふうに思ってはいけないと思う。
私は夢がないと言っても、たくましく生きていってくれればいいのだが、やはりたくましく生きるには夢が必要だったりもすると思う。
この思いもおそらく押し付けではなく、我々の想いであって、こどもたちはたくましく生きていくものを持っているはずなので、それを邪魔しないようにしてあげる方法、支える方法は必要であるという視点で考えていかなければならない。

中村委員
アンケート等でこどもの意見が集まることはいいことだと思う。意見を言うことはその子の将来的な人間形成において、本当に重要なところである気がしている。
資料３のヤングケアラーへの支援について、相談件数等を基準にして取り組みを評価するとのことであるが、どのような形でどのような方が相談に来ているのか。

こども若者総合相談支援センター長
ヤングケアラーについては取り組みを始めて２、３年になるが、ヤングケアラーの方からの相談はないのが現状である。アウトリーチで、やはり一番身近な大人である学校の先生からの相談がほとんどである。

中村委員
先生や周りの大人が気づいて相談をするということだと思うので実際にはもっと多い数字が出るものと思う。

佐野会長
資料２のアンケート結果の「結婚したいと思ったときに、行政や地域などからの支援が十分にある」と感じる若者の割合は深刻な問題で、生涯未婚率の上昇というのは、かなり大変な事態で、社会の根幹を揺るがしてしまうのではないのかと思う。
さらに、最近では保育職を希望する若者が少なくなってきているという現実もある。
年代別を見てみると、小学校は６年、中学校は３年、高校生年代は３年、若者は 20 年と、同じ年数の幅ではなく、そのようなことにも気にかけなければいけないかなと思う。
子育てと言いながらも全世代にわたって、ある程度気を配って社会を運営していく必要があると思う。

大谷委員
今日この会議に行くことを会で話した際に、息子にもこのアンケートが届いたという声があった。すごく困りながら書いたと言っており内容について読んでみると、何て答えたらいいかなというのが結構あるなと思うが、「こどもの権利が地域で守られていると感じるこども・若者の割合」61％について、このこどもの権利が地域で守られているってどういうところで感じ

るんだろうと思った。見ていくと、こどもが１人の人間として大切にされ、こどもらしく成長するために守られることが、こどもの権利といいますとあるが、学校に行ったときに、直接聞いた方が、多分本当の気持ちであったり、こどもの権利って何だろうっていうことを、自分たちで考えることができるのではと思った。

佐野会長
　こどもの権利と聞くとわからないため、具体的に自分から導き出していく中で、それが権利だっていうのをこどもが感じ取るような授業をしてくれる先生がいたらいいと思う。

佐野会長より閉会の挨拶